Chocolate　rain

ぷてぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｈｏｃｏｌａｔｅ　ｒａｉｎ

【Ｎコード】
Ｎ８５４５Ｑ

【作者名】
ぷてぃ

【あらすじ】
雨が降ってきた。
甘い香りの、チョコレイトの雨。
落し物のチョコレイトからはじまる、小さな恋の物語。

（前書き）

２０１１年バレンタイン短編。
拙い文章ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

雨が降ってきた。
甘い香りの、チョコレイトの雨。

見上げたら、頬杖をついた男の子がいた。
彼は、驚いた顔でわたしを見下げていた。

＊　＊　＊

「――これ、あなたのですか？」
差し出されたチョコは、いらないと言った。
すると、それを差し出した女の子は、少し迷ったように目を泳がせて、やがて口を開いた。
「なら、これ全部――……」

もらってもいいですか、と彼女は俺に問いかけた。

＊　＊　＊

彼は、キサラギくんと言うらしい。
らしい、というのも、名札に書いててあったからだ。
どこかで聞いたことがあると思ったら、同じ学年のひとで、女の子たちの会話の中でよく出てくる名前だった。

「あの、保健室にまで連れてきてもらって悪いんですが、ほんと大丈夫ですから！」
「でも、俺が心配だから！それにほら、保健委員だし。――って、関係ないな、これ」
我を押し通すこともないので、とりあえず保健室に来たけれど、これからどうしよう。
自分もだけど、このチョコレイトもどうしよう。
本当に貰ってもいいのかな？
彼はいいって言ったけど、こんなにたくさんのチョコレイト（ざっと数えて３０個はある）、どうやって持ち帰ろうか？

頭をぐるぐるさせている間、私たちは無言だった。
というか、彼も頭をぐるぐるさせているみたいだ。
理由がどうあれ、気付いてしまった以上この空気は気まずいので、私は笑いながら言った。
「チョコレイト、いっぱい貰ったんですね。いいな…羨ましいな」
「えっ、羨ましいの？」
キサラギくんは、またもや驚いた顔をする。
「だって、チョコレイトいっぱい食べられるでしょう？わたしも友チョコするけど、貰うだけじゃなくて渡さなきゃいけないんだもん。楽しいし美味しいけど、作るのはめんどーだよ？」
「へー…そうなんだ。意外と大変なんだね」
「うん。たぶん、このチョコレイトたちも、キサラギくんのために一生懸命作られたんだと思うよ」
そう考えたら、これを捨てるキサラギくんが酷い人に思えた。
なんていうか、女の敵。モテるからって、調子に乗ってんじゃねーぞ、みたいなカンジ？
「ごめん」
いきなり、キサラギくんが申し訳なさそうにつぶやいた。
私の考えを読みとったのかな。もしかしたらエスパーさん！？と

思ったら、
「チョコレイト、頭に当たってたよね。痛かった？」
……彼はエスパーではなかったみたいだ。
「それは…まあ。痛かったけど。だって、ハート型の箱の、とがってるところだったし」
「……重ね重ねゴメンナサイ」
「いえいえ、こちらこそ」
でも、私のごめんは彼に対するものではなくて、チョコレイト欲しさに女の子の純情を踏みつぶしてしまったことに対してだったりする。
彼もひどいけど私も女の敵だ。
「――あのさ、なんでキサラギくんはチョコレイトを、その、落としたの？いらなかったから？」
何気なくの質問に返ってきたのは、思いがけない言葉だった。
「実は、チョコレイト嫌いなんだよね。食べれないんだ」
前言撤回、彼は女の敵ではなかったみたいだ。
「……モテる男の子も大変ですネ」
「いえいえ、そんな。モテるだなんて、めっそうもない」
なかなか面白い男の子だ。
さりげなく優しかったりするし。
ちょっと抜けてるけど、なかなかポイント高いんじゃないかな。
ちらりと盗み見た横顔は、女子様が騒ぐのがよく分かった。
「――泉さん、どうしたの？頭、痛んだりする？」
「ううん、それは大丈夫。――あれ、キサラギくんはわたしの名前知ってたんだ」
すると、キサラギくんは手にしていた氷嚢を床に落とした。
しかも、その体勢のままフリーズしている。
「キサラギくん？」
心配になって声をかけると、彼は一瞬にして解凍した。
そして、少しのあいだ目を泳がせたり、口を開けたり閉じたりし

ていた。
「……もしかして、泉さんは、去年俺と同じクラスだったこと、覚えてないの？」
言われてみたら、そうだったような、ないような。
「あ……、その、ごめんね？わたし、記憶力悪くて」
これはもう記憶力の問題ではない気がするけど。
同じクラスだった人の名前も、ましてや顔さえも覚えてないなんて、失礼極まりない。
わたしのばか。あほ。まぬけ。――と呪ってみても、キサラギくんの落胆の度合いは時間とともに増しいるような気がする。
「……」
重すぎる沈黙に耐えきれなくなったわたしは、ありがとうだかごめんねだかを口走ると、逃げるように保健室を後にした。

＊　＊　＊

中学生のころから、気になっていた。
好きで、でも声もかけられずに、時間だけが過ぎて行った。
高校生になって、彼女と同じクラスになった。
近づけたことが嬉しかった。
話す機会は指折り数えるほどだったけど、それでも飛び上るほどに嬉しかった。
なのに。
一年後、ちょっとしたアンラッキーなハプニングから話すことができたとき、彼女は、僕の名前を覚えていなかった。

神様、これは何かの罰ですか？

＊　＊　＊

雨が降ってきた。
色とりどりの、キャンディの雨。

落ちたそれを拾ったとき、ついでのように紙飛行機が頭に衝突した。
ピンク色の紙飛行機の翼には、可愛らしい丸文字で文がつづられていた。

バレンタインのお礼です。たくさんのチョコレイトをありがとう。

見上げると、頬杖をついた女の子がいた。
彼女は、楽しそうに笑っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8545q/

Chocolate　rain

2011年2月14日01時10分発行